

## バッハ研究と私

皆様、本日は多数お集まりいただき誠にありがとうございます。いまご紹介下さった岡本章先生は、演出家として、また俳優として活躍の方なので、お話しているといつも意見が一致するのは、クリエイティブな仕事というのはひとりではできない、多くの方々の協力があってはじめてできるのだという事です。今日の最終講義にあたって「バッハ研究と私」などという恥ずかしい題を考えたのは、ただ自分のことを語るといよりは、このような私でも、今日の目を迎えるまでなんとかやってこられたのは、多くのすぐれた方々との出会いとお導きがあったことなので、そういう出会いこそが研究者にとっても芸術家にとっても最も大切にしなければならぬことだということ、特にこれから世の荒波を超えていかねばならない若い人たちに伝えていきたいと思ったからです（図版1）。

### 音楽・ドイツ文化との出会い

なぜバッハの研究者になったのか、とよく聞かれることがあります。自分でもよくわからないのですが、考えてみると、少なくともドイツ文化、ドイツ音楽との出会いの原風景は、やはり母親にあったのではないかと思います。少なからぬ胎教も受けていたらしい。

母樋口うた子（旧姓乾）は、ピアノ教師でしたが歌が好きで、ピアノ

ノでシヨパンを弾いたり、シューベルトやシューマンのドイツ・リートをよく弾き歌いしておりました。幼い私はいつもその側において、なんとなく見様見真似で歌っていたように思います。

私は一九四六年（昭和二十一年）に、玉川学園調布で生まれたのですが、まさに



図版1 樋口隆一最終講義 3201教室

樋口隆一  
（国際音楽学会副会長）

戦争直後のことでした。母の実家は本郷でしたが東京大空襲で丸焼けになり、当時東京音楽学校の作曲科に通っていた叔父の乾春男も、田園調布の家に同居していました。残念ながら彼はその後、二〇歳で自殺してしまいましたが、ピアノ曲《ペルソナ》などの曲を残していて、最近ではありがたいことにCDになったりしています。その叔父が家で作曲をしているのですが、幼い私はいつもその周りで踊っていたらしいのです。ずいぶん邪魔をしたのではないかと思います。

もうひとりの伯父に乾孝という心理学者がおりました。たいへん音楽が好きで、本当は音楽心理学をやりたいのだそうです。この伯父は鎌倉山に住んでいたため、小学校に行くようになると、夏休みはそこに泊まりに行って昆虫採集などをしていました。彼は当時としてはめずらしいLPレコードを沢山持っていて、いろいろ聴かせてくれ、自分でも勝手に聴いて良いと言ってくれました。好みはちょっと変わっていて、ストラヴィンスキーとかバルトーク、シェーンベルク、エリック・サティーなど、かなりのモダンリストだったようです。ブラームスも好きでした。子供は何を聴いても感動していたようです。

こういう伯父の存在はありがたいものでした。私が大学に進学したときも、経済学部とか政治経済学部ではなく文学部、それも美学を勉強したいと言いつつ、三菱系の堅い会社員だった父樋口季隆は、当然ながら大いに心配しました。しかしこの伯父や、もうひとり東大の美学を出て東宝の宣伝課長とか有楽座の支配人などをしてきた義理の伯父杉正作などは「それはいい」などと喜んで、いわば外野が盛り上がってくれるので、まじめな父も黙ってしまったというようなこともありました。父方の祖父樋口季一郎も元軍人だったので、ワルシャワで駐在武官をしていたこともあってオペラが好きで、「どうせ勉強するのなら、経済や法律よりも文学や哲学、音楽の方がおもしろいにきまっている」などというのには驚きました。どうせこの子は、まじめな勉強しても物にならないだろうと思われていたに違いありません。最近、この祖父が満州で大勢のユダヤ難民を救ったということ

テレビ番組で取り上げられ本が出たりするようになり、子孫に私や妹の樋口紀美子（ピアノリスト）のように音楽家が多いのは、季一郎が音楽好きだったからではないか、などと書いて下さることもあります。どちらかというとも母方のほうが音楽や学問の家系といえます。

母方の祖母というのは大澤という家の出なのですが、高祖父大澤謙二は明治三年の最初の政府留学生としてドイツ留学し、医学・生理学を修めて東京医科大学の最初の日本人教授となりました。曾祖父の大澤岳太郎もフライブルク大学で解剖学を勉強しました。人間とムカシトカゲや大山椒魚（ハンザキ）の比較解剖学をやったのだそうです。かなりの変わり者だったようですね。ドイツ学術交流会には医学の先生方も多いので、大澤岳太郎の曾孫だということおもしろがられます。亡くなられた吉田久先生（東京医科歯科大学学長、D A A D友の会初代会長）などは、わざわざこの曾祖父の思い出が書かれている昔の『医学雑誌』のコピーを下さいました。それによると「大澤先生のホーデン踊り」というものがお弟子筋で語り継がれていたそうです。宴会で酔っぱらうと裸になって踊るのですが、踊りながら人体の各部分を上から順番に触りながら、ドイツ語で呼び続け、最後はホーデンで終わるのだそうです。相当なものですね。

小学生の時、この曾祖父と対面したことがあります。もちろん生身の彼ではなく、全身の骨格標本。東大の赤門の奥に解剖学研究室の標本室がありますが、そこに彼の骸骨と、脳味噌のホルマリン漬けがあるのです。いつだったか養老孟司先生にお会いしたときにこの話をしたら、とても喜ばれました。

母方の祖父は乾政彦という法学者で、やはりドイツのボンに留学した人です。最近、早稲田大学出版会から、彼が翻訳したマイエル著『独逸國法論』などという書物が復刊されましたが、高価なので買っていません。

樋口の方の祖父季一郎は、ワルシャワの公使館付武官だったことであってヨーロッパ各地に旅行したようですが、新しい町に行くこと必ず

オペラ劇場に行ったそうです。もちろんオペラも好きだったのですが、それだけではない。オペラ劇場に行くに必ずその町の重要人物のどれかに会えて、その町のがよくわかるのだと言っていました。子供頃からそんな話を聞かされて、ヨーロッパへの憧れを抱いたのも事実です。座談の名手で、とてもおもしろい祖父でした。今日は思いがけずドイツからテオドル・ベルヒウム賞受賞のお知らせを頂いて感激しました。長いあいだボランティアで、学術と文化の国際交流のお手伝いをやってきただけのことです。好きでやっているのだから褒めていただくほどのことはないのですが、そういう国際交流は世界平和のために大切だ、ということを教えてくれたのはこの祖父だと思います。

さて、骸骨が残っている解剖学者の曾祖父は、ドイツ留学中にハイデルベルクで教師をしていたユリアというドイツ人女性と再婚しましたが、母の実家にドイツ音楽を根付かせたのは、まさにこの女性でした。ちなみに彼女は、横浜の外人居留地でドイツ人の貿易商と日本女性の間に生まれたハーフだったそうで、ヘボン先生夫妻ともなんらかの関係があったのではないかと推察しています。私の祖母は先妻との間の子なので、私は純粹に日本人なのですが、親戚にはユリアの子孫たちもいるので、自然とドイツへの親近感を持って育ちました。その祖母も、一三歳からハイデルベルクに留学させられたそうです。

さて、三歳になった私は、ヴァイオリンを習わせられました。先生は当時の日響（現在のN響）のヴァイオリン奏者だった大戸先生という立派な方でしたが、まもなく父は戦時中の無理がたたって結核を病み、大戸先生も急死され、さらには作曲家の叔父も自殺するという不幸が続く、ヴァイオリンは長続きしませんでした。ただ思い出として残っているのは、レッスンに行くと、どこかのお兄さんがヴィヴァルディの《ヴァイオリン協奏曲イ短調》を弾いていて、自分はまだ弾けないのだけれどもそれをすぐに憶えてしまい、家に帰るまでずっとそれを歌い続けていたということです。

小学校は学芸大学附属竹早小学校に通いました。音楽の先生は渡辺

茂先生。あの童謡《たきび》や《ふしぎなポケット》を作曲された方です。今から考えるとたいへん立派な音楽教育をして下さいました。初歩のソルフェージュや指揮法のほか、簡単な西洋音楽史まで教えて下さった。なんと中世の音楽理論家グイド・ダレツツォの名前まで、全員に憶えさせて喜んでおられました。

中学と高校はこの近くの麻布学園。中学の三年間はバスケットボールとソフトボールで毎日泥まみれになって遊んでいて、勉強はほとんどしませんでした。しかし中学三年になると、いつの間にか音楽に引き寄せられていました。音楽の先生はのちに芸大のソルフェージュ科の教授になられた広田幸夫先生。チェリストだったのでなぜか学校にチェロを何台か買わせておられた。授業中に「チェロを弾きたい子は教えてあげる」とおっしゃるので、自然と手が上がっていました。そのうえ音楽部にスカウトされてしまった。気がついてみると合唱と弦楽合奏に明け暮れる毎日でした。この講義の準備をしていて急に思い出したのですが、そのころすでにテレビ出演までしていました。六本木の日本教育テレビ（現在のテレビ朝日）の学校放送の時間に弦楽合奏で出演して、バッハの《ポロネーズ》を弾いていました。フルートは比田井君という下級生で、なんでもお父さんが有名なフルート奏者とかで、あの難しい独奏部でも簡単に吹けるくらい上手でした。このあたりが、私の「バッハとの出会い」ということでしょう。

### 大学で出会った先生方

大学は慶應義塾大学ですが、経済学部とかには行かないで文学部に入り、哲学科美学美術史学専攻に進学しました。広田幸夫先生が、チェロで芸大を受けないかと言っては下さったのですが、チェリストになろうという気にはなれなかった。それに作曲家だった叔父が二〇歳で自殺していたので、あまり正面切って音楽家になりたいとはいえなかった。だからなんとなく音楽に関係することができれば良いくらいの気

持ちで慶應に入ったのです。

音楽に関しては三人の先生方の影響を受けました。ひとりには有名な音楽評論家の村田武雄先生。この先生は、バーンスタイン指揮のマーラーなどを聴かせてくださり、つくづく「良いですね」とおっしゃる。そうするとなんだか本当に良いような気になってしまう。こういう暗示力も大切なことだと思います。

いちばん影響を受けたのは、残念ながら亡くなられた中野博詞先生。当時はまだ助手の若い先生でしたが、ケルンのハイドン研究所と東京を往復されながら、ハイドン全集のなかの『パリ交響曲集』の校訂をしておられました。そういう楽譜校訂の現場のお話を聞いているうちに、自分も何かそうした仕事をしてみたいと思うようになったのです。

ある日、中野先生が「卒論には何を書きたいの」と聞いて下さった。若い頃は新しい音楽が好きなのなので、たしかストラヴィンスキーとかシェーンベルクとかフォーレとか言ったと思います。すると先生は、「それも悪くはないが、もし音楽史の研究を本格的にやりたいならば、最初はすでにある程度研究の蓄積のある古い音楽を研究して方法論を身につけなさい。あたらしい音楽はその後でもできるけれど、最初から新しい音楽を研究してしまうと、前に遡るのはなかなか難しい」とおっしゃる。今から考えると、これは本当に至言だと思います。ほんとうにバッハの研究は難しいです。ひとつの論文の本当の意味がわかるまで何十年もかかります。言葉だつて難しい。ドイツ語も日常会話程度ならそれほどでもないけれど、一七世紀、一八世紀のドイツ語は、ドイツ人でもよくわかりません。古文ですからね。ただそういうものが読めないと、本格的な研究はなかなかできない。だから若いときはそういうことをきちんとやっておくと、後になってから良いよ、というのが中野先生のすばらしいアドヴァイスだったと思います。

そこで先生に「バッハの研究をやりたい」と答えたところ、強く反対されました。そもそも西洋音楽史の研究は一八世紀の終わりからドイツで始まったのですが、それもバッハ研究から始まりました。だから

らバッハに関する研究もほとんど無限と言っていいほど有り、それを全部読んだ人などいないくらいなのです。そのうえ日本にもすでに立派な先生方が沢山おられるので、それは辞めた方が良いよと言われたのです。しかし若いころはそんなことはあまり考えない。やはり自分が曲がりなりにもチェロでいろいろな美しい曲を弾いていたので、バッハが好きだった。バッハになにか近いものを感じていたのです。そんなわけで無謀にも、ついつい難しいバッハ研究に足を踏み入れてしまったわけです。

もうおひとりとは皆川達夫先生です。皆川先生に頂いた一言が、その後、私の人生を変えてしまったと思います。皆川先生はニューヨークでクルト・ザックスという比較音楽学の大家に習われたのですが、そのときザックスから「日本は将来かならずや世界の音楽研究の上で理想的な国になる」と言われたのだそうです。たしかに日本や東洋の音楽に感性を持ち、しかも西洋音楽も理解している人間が日本にはいる。これは世界の音楽を研究する上でとても重要なことなのです。いま私は、国際音楽学会副会長として二〇一七年三月に、その第二〇回世界大会を東京で開催する準備に明け暮れています。皆川先生から教わったザックスの予言を思い出してがんばっております。

大学院、特に博士後期課程時代にもすばらしい先生方に会いました。たとえば美学と西洋美術史の高橋巖先生です。高橋先生は、早く退職されてルドルフ・シュタイナーの研究に専念されることになりましたが、美術史家としてはやはりD A A D奨学生としてミュンヘン大学に留学され、ハンス・ゼーデルマイヤー教授に師事されました。高橋先生からはドイツ留学に関するたくさんのお話をいただきました。

美学の竹内敏雄先生は、東大を退官されたばかりで、ちょうど岩波書店の『ヘーゲル全集』のために『美学講義』の邦訳を次々と出されていた頃でした。そこで授業では、訳されたばかりの原稿を嬉しそうに読んで下さったのです。それをうかがっていると、ヘーゲルのよう

な難しいドイツ語をきちんと訳すというのとはこういうことだ、ということを書いて知らせました。

スコラ哲学ないしは形而上学の第一人者だった松本正夫先生。なにしろスコラ哲学ですから難しすぎてさっぱりわかりません。「第一志向」とか言われてもよくわかりません。しかし先生ご自身はスコラ哲学がまさに血となり肉となっておられるので、たいへん嬉しそうに語り続けられる。その博識に圧倒されましたが、それだけに学問の難しさを楽しませていただきました。松本先生は、日本国憲法の制定に関わられた松本丞治先生の息子さんでした。父上の松本丞治先生は、母方の祖父乾政彦と一高東大の同級生で、GHQによって否定されてしまう憲法草案の作成に関しても、もうひとりの同級生だった東大の穂積重遠先生と三人で苦労されたということです。

科学哲学の沢田允茂先生はたいへん元気の良い先生でした。日本とアメリカを往復されながら、当時アメリカで始まったばかりのエコロジー（環境学）を哲学的に考察するという、当時としては最新の研究を教えて下さいました。最近調べたところ、沢田先生の父上の沢田茂中将（参謀次長）は、一九三九年に樋口の祖父（当時参謀本部第二部長）の直接の上司で、ともにノモンハン事件（満州とモンゴルの国境紛争を理由とした日ソ直接交戦）の幕引きに腐心した間柄だったことがわかりました。ふしぎなご縁を感じざるを得ません。

ドイツ文学の高橋義孝先生は、横綱審議会委員としても知られた方でしたが、トーマス・マンやゲオルク・ジンメル（ドイツ語の原文に）の難しいドイツ語をみごとに読み解いていただきました。ひとつのドイツ語の原文に対して三種類くらいの日本語訳を示して下さいました。「さあ君たち、このなかで日本語としていちばん良いのはどれですか」と尋ねられるので参りました。そんなこと言ってみたくいけれど、いまだにできませんね。そのぐらいドイツを訳す名人であられました。

国文学の池田弥三郎先生は、大正時代の文学に関する共同研究をしておられたのですが、音楽も必要だということ、だれか友人を紹介

て仲間に入れていただきました。そこで大正時代の唱歌や童謡に関する原稿を書いたのですが、結局、報告書にはスペースの関係で載せられませんでした。そうしたら「せっかくなにか書いてほしい」と言われて、『芸能』という雑誌に紹介して下さいました。「学校唱歌考——大正時代の子供の歌」、これがちゃんとした雑誌に載った最初の論文となりました。後年、「日本近代音楽館」を明治学院大学図書館に導入することに腐心するわけですが、こんなこともどこか関係しているのではないかと、ふしぎなご縁を感じてしまいます。

英文学の西脇順三郎先生は高名な詩人でもあられましたが、存在そのものが「芸術」のような方でした。なにしろ時間の観念などない。一時間半の授業なのですが、シュルレアリスムとは何かとか、ギリシャ語と古代漢語の比較論などを嬉しそうに三時間ぐらい喋っておられる。さすがに学生も疲れて舟を漕ぎ始めるのですが、そんなことはお構いなし。ようやく終わると、「樋口君、これから僕は村野四郎君と茗荷谷で会うのですが、乗っかってくれませんか」などと言われる。バックミラーをそっと覗くと、さすがに三時間の熱弁で疲れられたのでしよう。大詩人はすやすやと眠っておられました。

僕は当時、唯一慶應にクルマで通学していた生意気な学生でした。なぜそんなことが可能だったかという点、北門の外に一台だけ駐車できるスペースがあり、そこに毎朝七時頃にクルマをとめていました。朝七時に来る学生なんかいるわけもないので、毎日楽勝で駐車してました。これは僕が勤勉だったわけでも何でもなく、理由がありました。当時、父親の会社が相模大野にあり、そこに遠距離通勤するため、毎朝新宿駅まで送って行くことを条件にクルマを買ってもらっていたわけです。そのあと三田の慶應まで行って、たったひとつある駐車スペースに悠々ととめて、誰もいない美学の研究室に行き、お昼まで勉強していました。

思い返せばその頃、西脇先生は明治学院大学の教授をされていて、慶應では大学院博士後期課程だけ教えておられました。のちに私も、

明治学院大学の教授をしながら慶應の美学の大学院を教えていた時期がありました。そういえば西脇先生もそうだったなと思うと、ちょっと嬉しかったことを思い出します。

日本美術史の河合正朝先生は、当時助手で、僕らより五年くらい先輩だったのでとても親しくさせていただきました。いまだに先生を中心に「KAWAII（かわいい）会」という集まりがあって、当時の悪童たちが集まってお酒を飲んでいました。河合先生にはほんとうにお酒の飲み方を教わったという感じです。浅草の雷門にお家があったので、銀座でビールを飲んだ後、みんなで邪魔すると、お父様が出てこられてまた朝まで飲む、なんていうことをやっていました。本当にご迷惑をおかけしたと思います。現在は千葉市立美術館長として活躍です。のちに慶應の教授とされる西洋美術史の末吉雄二先生、前田富士男先生は大学院の何年か先輩、のちに東京国立博物館副館長になった日本美術史の金子啓明さんは一年先輩で、展覧会や画廊に連れて行って頂いたり、ずいぶんお世話になりました。同級生の美山良夫さん（フランス音楽史）、茂木博さん（西洋美術史）にも大変お世話になりました。ほんとうにこういう方々とお付き合いしながら、多方面にわたる耳勉強をさせていただいたことをありがたく思い出します。

### ライプツィヒ・バッハ・アルヒーフ

一九七二年に、突然ドイツに行く機会が転がり込みました。前年の一九七一年にライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の日本公演があったのですが、若いコンサートマスターのエーベルハルト・パルムさんが高橋巖先生のお友達だったのです。しかし先生はご忙だったので、当時多少はドイツ語話も習っていた私が、先生の代わりに鎌倉をご案内することになったわけです。するとその彼に「君は何を勉強しているの」と聞かれました。「バッハです」と答えると、「ドイツ

には来たことがあるのですか」と言われる。

当時、バッハの都ライプツィヒは東ドイツだったので、行けるわけではないと思っていました。すると彼は「ライプツィヒ市民の私がこうして日本にいるのだから、君もライプツィヒに来られないわけではない、バッハ・アルヒーフのノイマン所長に何か方策がないか聞いてあげましょう」と言ってくれたのです。親切な人だなと思いつながら、あまり期待していなかったのですが、ある日、そのウエルナー・ノイマン教授から立派な招待状が届きました。厚紙で、あたるところにはバッハの横顔が浮き彫りになって圧されていたのには驚きました。「あなたの研究についてお話が聞きたい」などと書かれていました。

ノイマン教授はバッハ研究の第一人者で、そんな偉い先生にお聞きせするような研究はまだ何もしていなかったのですが、とりあえずその手紙をもって外務省に行くと、「学術交流だから大丈夫ですよ。原文と邦訳のコピーを十部ずつ作って持ってきて下さい。二〜三週間では済みます」といわれる。そこで親から借金をして、なにがなんだかわからないままにライプツィヒをめざしました。

ライプツィヒでは、バッハ・アルヒーフ（バッハ資料館）の客員研究員にいただきました。所長はノイマン教授、いまでは有名なハンス・ヨアヒム・シュルツェはまだ助手をしていました。昔、若きゲーターも訪れたというライプツィヒ郊外のゴリス城 Golliser Schloßchen というところであって、すばらしい環境なのに驚きました（[図版2](#)）。

当時はドイツに行くのもけっこう大変で、一番安かったエジプト航空の航空券を大学生協で買っていきました。南回りの各駅停車。カイロで一泊しなくてはならない。そんなわけでスフィンクスも見られたのですが、疲れましたね。いまではとてもできません。

さてバッハ・アルヒーフはそんなお城の中にあつて優雅だった上に、バッハに関する全ての資料が揃っていました。文献だけでなく、自筆譜や筆写楽譜などもマイクロフィルムから写真に焼き付けたものが整



図版2 バッハ・アルヒーフがあったゴーリス城

はありません。ちゃんと小さな部屋を与えていただいて、静かな中で勉強ができました。

ノイマン先生に「何をしたらいいでしょう」とお伺いを立てると、『新バッハ全集』の校訂報告書を読むことから始めさせられました。ここにはなんでも揃っているから、校訂報告書に出てくるあらゆる手稿譜の写真資料を手元に置いて比較しながら、報告書の記述が間違っていないかどうか検証しながら読めというのです。それは大変な仕事で、一頁読むのに半日もかかります。最初に読まされたのはテュービンゲン大学教授だったゲオルク・フォン・ダーデルセンが校訂した『アンナ・マクダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集』。それを検証していくと、バッハや彼の妻アンナ・マクダレーナ、そして彼らの息子たちの筆跡の違いがわかるようになります。さらにゲッティンゲン・バッハ研究所副所長だったアルフレート・デュル博士が校訂された教会カンタータ『目覚めよと呼ぶ声あり』BWV一四〇の仕事を検証させられました。すると、バッハが教会カンタータを上演したときに、彼を助けてパート譜を筆写した弟子たちの様子がわかります。年代設定のためのコピースト（筆写者）の筆跡鑑定や、五線紙に使われた紙の特定のための「透かし」の研究など、学ぶべきことはたくさんありました。

なるほど、研究というのはこういうことなのだということが、おぼろげながらもわかってきました。日本人は頭が良すぎて、なんでもすぐにわかったような気がして先に進みますが、それでは本当にわかったことにはなりません。ほんとうに一字一句、その裏をとりながら読み進める。ひとつの資料を見たら、それがどういう由来を経てそこに至ったかを調べる。そうやって読むのですから、それは大変です。しかしだからこそ、やっているうちにおもしろくなってきます

若い皆さん。もしほんとうに音楽の研究をしたいと思ったら、学術的な全集の校訂報告書がきちんと読めるようになることから始めて下さい。そこには大事なことはみんな書いてあります。そこから研究の

理されている。あらゆるデータも揃っていて、何か調べようと思っても、三十分あれば参考書類はすべて机の上に載ります。日本でやってきたように、本を取り寄せるのに二〜三ヶ月かかるというような苦労

最初のスタートが切れるのです。例えばシェーンベルクの研究がしたかったら、まず『シェーンベルク全集』の校訂報告書を読みます。とても難しいですが、それをやらないと本格的な研究者にはなれません。残念ながら、日本ではそういうことを学ぶ機会が多いとはいえません。私はまずライプツィヒのバッハ・アルヒーフで、そういう洗礼を受けることができて本当に幸せだったと、つくづく思います。

バッハ・アルヒーフは、研究だけではなく、バッハ音楽祭やコンクールなども主催しています。研究と実践との対話というか、両者がひとつになって進んできたのがバッハ研究の特色なのです。私自身も明治学院バッハ・アカデミーを中心とした指揮活動も行っていますが、それはドイツのバッハ研究の伝統をそのまま実践しているに過ぎません。

たとえばこの写真(図版3)は一九七二年のライプツィヒ国際バッハ・コンクールの際に撮られたものですが、左は作曲家で審査員だったルート・ツェヒリン、右はチェンバロ部門の優勝者だったチリのリオネル・パーティー Lionel Party という人です。中央の私も含めてなんとなく国際的な絵柄だからでしょうか、その後二〇年以上、アイゼナハのバッハハウス博物館に展示されていたという話です。コンクールには、後年、ベルリン・フィルのコンサートマスターになったライナー・クスマウルも出場して四位に入賞しています。一位と三位は東ドイツとソ連が占めました。西ドイツから来て四位になったクスマウルのほうがうまいというのが裏情報だったことを憶えています。

さて、ライプツィヒには行ったところ、規定で外国人旅行者は高価なホテルに泊まらねばなりません。とても学生には払いきれない。それではうちに泊まればいいということになって、私はパルム家の居候になって、彼らと生活を共にさせてもらいました。日曜日になると皆で森に散歩に行ったりして、ドイツの家庭生活を知ることができました。もちろんパルムさんはコンサートマスターなので、定期演奏会のほか、オペラ劇場、聖トマス教会で教会音楽など、毎日仕事があります。日本では当時あまりオペラが盛んとはいえなかったので、ほとん



図版3 ライプツィヒ・バッハ・コンクール1972 左からツェヒリン、樋口、チェンバロ部門優勝者リオネル・パーティ

ど毎晩オペラを見させてもらいました。終演後も楽屋口で待ち合わせと一緒に帰り、その日の公演について話し合います。こうした体験が、後年、音楽評論家としての活動の基礎になったと思います。

その頃、パルム家には生まれたばかりの赤ちゃんがいたのですが、

現在はバス歌手として活躍しているクリスティアン・パルムです。僕もなんとなく兄貴のような気がしているので、昨年、サントリーホールでの《ミサ曲口短調》演奏会でも独唱者として使ってあげたわけです。彼は子供の頃から聖トマス教会合唱団員としてバッハの教会音楽には慣れ親しんでいるので、本当に自然なバッハを聴かせてくれますね。

パルム家に居候している若い日本人ということで、ライプツィヒの主要な音楽家ともお近づきになれました。例えば作曲家のジークフリート・ティールさんは、後年、メンデルスゾーンが創立したライプツィヒ音楽院の学長になりましたし、もちろん当時のトマス・カントルだったハンス・ヨアヒム・ロッチュさんとも知り合うことができました。先代のトマス・カントルだったエアハルト・マウエルスベルガー先生には、バッハ・アルヒーフでノイマン先生から紹介していただきました。小柄な老人でしたが、握手が力強くて暖かかったですね。

夏休みに入っても時間が惜しいので、私はひとりライプツィヒに残って研究を続けていましたが、さすがに高熱を出して倒れてしまいました。パルムさんは心配して避暑地から戻ってこられ、僕も静養のためにバルト海沿岸の漁村アーレンスホープに連れて行かれました。このあたりはかつて山田耕筰が避暑に来たディアハーゲン村にも程近く、後年、山田耕筰の本を読むと当時の様子がよく理解されたものです。二〇一三年十一月には、ベルリンのコンツェルトハウスで「日本の響き、ドイツの響き」という演奏会を指揮し、山田耕筰の合唱付管弦楽曲《秋の宴》をドイツ初演（ドイツ語オリジナル版の世界初演）してきましたが、ベルリンで苦勞した山田耕筰への共感がその原動力でした。

### 国際音楽学会コペンハーゲン大会

一九七二年夏にはコペンハーゲン大学で、国際音楽学会（IMS）の世界大会が開催されました。若輩にもかかわらず参加したのは、

「国際学会の雰囲気を知るだけで良いから参加してきなさい」という皆川達夫先生の一言があったからです。

実際、参加してみると良いことばかりでした。ボンのペーターヴェン研究所で活躍されていた児島新先生も来られたので、後について歩いてみると、発表の内容や、重要人物のことなどいろいろ解説して下さる。後になってわかったのですが、児島先生は麻布高校の先輩で、帰国されてからもいろいろご指導いただきました。

国際音楽学会における当時の日本代表理事は野村良雄先生で、ドイツ音楽学会の重鎮フリードリヒ・ブルームに紹介して頂きました。本の背表紙でしか知らない大家に優しい言葉をかけて頂き、若造としては感激したものです。バッハ、モーツァルト、ハイドンの新全集にしても、『ハイドン全集』を出版するために設立されたヘンレ出版社にしても、ブルームの提案によってできたようなものですから、こういうオーガナイザーは重要ですね。

国際学会ではパーティーや遠足も楽しいのですが、ハムレットの名城に行く遠足では、ゲッティンゲン・バッハ研究所副所長のアルフレート・デュル博士ご夫妻と一緒にになりました。「ライプツィヒであなたの校訂報告書を勉強してきました」と言ったらとても喜ばれました。後年、『新バッハ全集』の校訂者としてとてもお世話になるわけですが、この時はそんな運命は知るよしもありません。当時の私にとってはバッハ研究の神様のような人ですから、お会いできただけ嬉しかったのです。

慶應の高橋巖先生はドイツの学者の知り合いも多く、あるとき鎌倉でハンブルク大学の美術史の教授に紹介されました。たしかイーザーマイヤー Christian Adolf Isermeyer 先生だったと思いますが、その先生が、コペンハーゲンに行くならぜひとも作曲家のイングヴェ・トレーデ Yngve Jan Trede 夫妻を訪ねなさいと言って住所を渡されました。そこで連絡を取ってお訪ねすると、奥様のシグネさんは怪奇小説家でオルガン製作者としても有名なハンス・ヘニー・ヤーンのお嬢

さんでした。お宅はコペンハーゲン郊外の海岸沿いの松林の中に建っていて、トレーデ先生はチェンバロでバッハに影響を受けた作品を弾いて聴かせて下さいました。

国際音楽学会では、パリ在住のヴェトナムの音楽学者トラン・ファン・ケー先生とも知り合うことができました。当時はアジア人の参加者は少なかったので、アジア人だというだけでなにか親しみを感じたものです。

それからあつという間に四三年の歳月が経ちました。二〇一一年には、日本代表理事として東アジア部会の結成に携わり、いまは副会長として二〇一七年の東京大会の準備をしています。二六歳の時に受けた恩恵を、次世代に手渡して行ければ嬉しいのです。

### 国際美学会議ブカレスト大会

この年は、ブカレストで国際美学会議というものがあり、これも高橋巖先生から「ルーマニアを見られるだけでも良いから行っていらっしやい」といわれて参加しました。すると、今道友信先生が指導的な役割を演じておられて、日本人でも国際学会で活躍することができるようだと、感動した覚えがあります。ここでも遠足がおもしろく、野村良雄先生のお供をして、美しいフレスコ画で彩られた修道院が点在するモルダヴィア地方に行ったりしました。パーンの笛で有名なルーマニアの民族音楽を聴いたり、美学会議にふさわしくルーマニアの美女が次々に出演するファッションショーを見たりと、日本の学会では考えられないような楽しいひとときでした。

会長の美術史家ヨーゼフ・ガントナー先生には今道友先生に紹介して頂きました。なにしろ日本から若い大学院生が来たとなると珍しいから、偉い先生方もかわいがって下さった。その気持ちは今よくわかります。どんな学会でも、その未来は若い人たちにかかっているからです。ですから若い皆さんも、気後れしないでどんどん国際学会に参加

して頂きたい。そうすれば必ず収穫があるものです。行き損ねるとだんだん億劫になるかもしれません。

ガントナー先生ご夫妻は、僕が多少ドイツ語を話すので喜ばれて、バーゼルに來たら家に來なさいとまで言ってお下さる。嘘かと思つたのですが、本当でした。

野村先生にも旅行のお供をしたりして親しくお話ししていると、いろんなことがわかります。なんと竹早小学校の大先輩だったので。こんな偉い先生にも小学生の頃があつたのかなどと考えると、ふしぎな気持ちになつたものです。

### ギリシャ・イタリアの冒険旅行、そしてまたドイツへ

ブカレストの後は冒険旅行が始まりました。ルーマニアから汽車でブルガリアを抜けてギリシャに向かったのです。西洋美術史も勉強していたので、ギリシャへは強い憧れがありました。百聞は一見にしかず。例えば「ドリア式の列柱」などと学んでも、あの強いギリシャの陽光の下に生じる光と影のコントラストを見なければ、本当のことはわかりません。

さてイタリアを縦断してフィレンツェに着いた頃には路銀も底をつき、無一文になっていました。仕方なく親に葉書を書いて送金を待っていました。サンタ・トリニタ教会というところでジオットのみごとな壁画を見てポーツとしてみると、向こうから見たような顔がやってくる。当時、パリで美術史を勉強していた富士栄厚君でした。金がないというのと、「腹が減っては戦ができません。俺がおごつてやるよ」というわけで、フィレンツェ名物の大きなビフテキをご馳走になりました。ブカレストでガントナー先生と知り合いになつたというのと、ぜひ自分も連れて行けという。そんなわけで二人揃ってバーゼルのガントナー家をお訪ねしました。

ガントナー先生は座談の名手で、とにかくおもしろい。『フェリー

「二のローマ」という映画が封切られたばかりだったので、まだ見ていないというと、「美術史や音楽史をやるという若者があの映画を見ていないのはけしからん。今すぐに行行って見てきなさい」と言われる。娘さん夫妻の引率で映画館に直行しました。帰ってくる夕食の用意ができていて、それを頂きながらお話を伺うという贅沢な一日でした。なるほど、フェリーニが描いたあのローマの情熱がわからなかったら、カラヴァッジョもイタリヤ・オペラもわからない。芸術を学ぶにはこういう俗っぽさも必要だと言うことを、教えて下さったのだと思います。やっぱり大家は違いますね。凄いです。

バーゼルで富士栄君と別れた僕は、一路ミュンヘンへ。すると列車の中で知り合った若いドイツ人が、「ホテルの予約はしたのか」と聞いてくれました。ユースホステルにでも泊まるからと言ったのですが、「オクトーバーフェスト（十月のビール祭）の最中に、予約無しでミュンヘンに来たって泊まれるはずはない。だめだったら僕に電話しなさい」と強引に電話番号をくれました。すると案の定、どこも満員でした。なんとか彼のアパートにたどり着くと、同じコンパートメントにいたアメリカ人とオーストラリア人の女の子もいる。すっかり世話を案内してくれました。なんて親切な人だろうと思いましたね。このディルク・ヘーヴィ博士はバイエルン文化教育省の若い役人だったので、学生時代にとて苦学したので、貧乏な外国人学生たちを見捨てておけなかったらしい。チュービンゲンに留学するようになってからも、ミュンヘンに行くとなると彼のところに泊めてもらいました。後年彼は、事務次官にまで出世し、新バッハ協会副会長、ドイツ・モーツァルト協会会長も務めました。世話好きで有能ですから当然だと思えました。のちにピアニストのシルヴィア・トレッシャーと結婚したので、明治学院バッハ・アカデミーに招待してリサイタルをしてもらったのですが、そのときなんと、ライプツィヒで会ったルート・ツェヒリンの曲を弾いてくれたのです。まさにふしぎな運命の糸を感じ

じましたね。

### ゲッティンゲン・バッハ研究所

バッハ研究も忘れたわけではありません。長い旅の最後に、前田昭雄先生のご紹介で、北ドイツの大学町ゲッティンゲンにあったヨハン・セバステイアン・バッハ研究所に小林義武さんを訪ねたのです。当時、小林さんはまだ大学院生で、フランツ・ハウザーという一九世紀の歌手が残したバッハ・コレクシオンに関する博士論文を執筆中でした。ドイツで博士論文を書くというのはいかに大変かという話を、一晩聞かせてくれました。当時彼は非常に苦労しておられた。指導教授はハインリヒ・フスマンという有名な学者だけど、人間的に難しい人だったらしい。残念ながらドイツではよくあることなのです。ありがたいことに、バッハ研究所のデュル博士が人格者で、博士論文に関しても実際のところはデュル博士に指導されているようなものだと言っていました。研究所で我々が話していると、コペンハーゲンでお会いしたデュル博士も出てこられて再会を喜ぶこともできました。この研究所の使命は、ライプツィヒのバッハ・アルヒーフと協力して、『新バッハ全集』を編纂することでした。東西ドイツの分断という難しい状況にありながら、この難事業を推進する編集本部の役割を演じていたのです。このときはもちろん、後年、自分自身も『新バッハ全集』の校訂者に採用して頂き、デュル博士のご指導を受けるようになるなどとは、想像もしていませんでした。

### D A A D 奨学生としてチュービンゲン大学に留学

なんとか日本に帰ってはきたものの、ライプツィヒ、ゲッティンゲンと、本場ドイツのバッハ研究の現場を見てしまうと、今後日本でやっていたという気はさらさらなくなっていました。そこで試しにドイ

ツ学術交流会(DAAD)の奨学生試験を受けたわけです。二、三回受けているうちには受かるだろうというような気楽な気持ちで受けたのですが、運良く一回で合格してしまい、一九七四年の秋から西ドイツ、テュービンゲン大学音楽学科に留学しました。一年の予定だったのですが、博士論文を執筆することになったために結果的に五年間もドイツ暮らしをすることになりました。

指導教授はゲオルク・フォン・ダーデルセン教授。ライプツィヒで最初に校訂報告書を読んで勉強した『新バッハ全集』の『アンナ・マクダレーナ・バッハのクラヴィーア小曲集』の校訂者で、ゲッティンゲン・バッハ研究所の所長を兼ねておられました。ダーデルセン教授とデュル博士は高校の同級生。お二人とも戦中派でした。デュル博士は戦時中、メッサーシュミット戦闘機のパイロットだったそうで、カーマニアでした。BMW5シリーズでの運転がお好きだったようです。ダーデルセン教授は東部戦線で負傷され、片目を失われていました。その目でバッハの資料研究をされていました。そんな先生が私のひどいドイツ語の論文を読んで下さり、添削までして下さいました。本当にありがたいかぎりです。

テュービンゲン大学にはもうひとりバッハ研究の大家がおられました。ウルリヒ・ジーゲレ教授です。この先生は音楽分析の専門家です。バッハだけでなくシュトックハウゼンの《マントウラ》とか、ブーレーズの《ル・マルト・サン・メートル》の分析を教えてくださいました。さらに、バッハを取り巻く一八世紀の文献資料の解説もお得意で、当時の文献を読むためには一八世紀の辞書を使わなければならないとか、非常に基本的なことを教えてくださいました。

アーノルト・ファイル教授は、ゲオルギーアデス門下として知られるシューベルトの専門家でした。テュービンゲンの研究所には『新シューベルト全集』の編集部があったので、編集主幹のヴァルター・デュル教授にも教わる事ができました。毎朝七時頃に近所のプールに行くのと、デュル先生も来ておられて、ご一緒に泳ぐわけです。それから研

究所に出かけ、毎日、九時から夕方の五時まできちんと仕事をすることが日課でした。資料研究は体力勝負なので、水泳で身体を鍛えていたのです。このヴァルター・デュル先生は、ゲッティンゲンのデュル先生の従兄弟で、ドイツの音楽学者はお二人を区別するために「バッハ・デュル」、「シューベルト・デュル」と呼ぶのが常でした。

ベルンハルト・マイヤー先生は、中世・ルネサンス音楽の旋法論の大家でした。今考えると、本当に凄い先生方のもとで学ぶことができたと思います。まさにテュービンゲン大学音楽学科の黄金時代でした。その後、ドイツは大学改革の嵐が吹き荒れて、音楽学科もずいぶん小さくなってしまいました。伝統を続けると言うことは難しいことなのです。

大学音楽監督はアレクサンダー・スムスキー先生。この方に指揮を習うことになりました。

当時の若手には、音楽叢書『ダス・エルベ・ドイッチャムジーク(ドイツ音楽の遺産)』と『E・T・A・ホフマン音楽全集』の編纂をしていたトーマス・コールハーゼ博士もおられました。現在は『チャイコフスキー全集』の編集主幹をしておられます。助手は、のちにカールスルーエ大学教授になったジークフリート・シュマルツリート博士と、フォルカー・シュェルリース博士でした。シュェルリースさんは、のちにアルバン・ベルクの評伝を書いて有名になりました。

同僚はウルリッヒ・プリンツ。彼はバッハのカンタータにおける管楽器の使用についての博士論文を書いていて、毎日、朝の九時から夕方の五時まで、きちんと仕事をする人でした。そういう人がいるとありがたいので、僕も毎日、彼の隣に座って仕事をすることができたのです。資料研究はとても根気がいるので、こういう同志がいてくれたことが助けになったのです。僕は本来あまり勤勉ではなかったのですが、プリンツさんに付き合うことで勤勉にして頂いたと思っています。

こうして毎日仕事をしていると、ときどきシュトゥットガルトのヘンスラー社で楽譜校訂をしていたクラウス・ホフマン博士が訪ねてき

ます。三人で近所の立ち飲みコーヒーを飲みに行つて雑談したりしました。ホフマン博士はのちに、デュル先生が定年退職されたとき、その後任としてゲッティンゲン・バッハ研究所副所長となられました。プリンツさんは私より一年ほど早く博士論文を完成し、シュトゥットガルト国際バッハ・アカデミーの学術主任になりました。

テュービンゲン時代に私たち夫婦が最も仲良くさせて頂いたのは、三宅幸夫夫妻です。いまは日本ワーグナー協会理事長として有名な方ですが、お互いに当時は学生時代なので、楽しい思い出がたくさんあります。そして忘れてはならないのはオルガニストの堀英彦さん。当時はシュトゥットガルトの教会のカントルをしておられました。テュービンゲン大学でも学んでおられました。三宅さんと三人で一七世紀の作曲家クリストフ・ベルンハルトの『歌唱法について』を日本語訳したことは懐かしい思い出です。早く亡くなられたのは残念なことです。

テュービンゲンは中世の面影を残した大学町で、かつてヘーゲル、シェリング、ヘルダーリンが共に学んだことが知られています。ネッカー川のほとりには、精神を病んでしまった天才詩人のヘルダーリンが幽閉された「ヘルダーリンの塔」が今も建っています（図版4）。こういう町でのんびりと勉強できたことは、幸せだったと思います。あの《ローレライ》の作曲家として知られるフリードリヒ・シルヒャーも一九世紀には大学音楽監督を務めていて、ネッカー川の中州に大きな石像が建っています。

音楽学研究所も一六世紀の建物で、音楽学の専門図書館もあり、私とプリンツさんはその中の「全集部屋」で、毎日仕事をしていました。そこにはいろいろな作曲家の全集が並んでいるので、バッハの研究に疲れると、パレストリーナの全集、デュファイの全集といった具合にいろいろな楽譜を取り出して眺めていました。プリンツさんやホフマンさんの意見交換のほかに、そういうことも肥やしになったと思います。

テュービンゲンでは、最初の半年をジーベトさんという方の家の下



図版4 テュービンゲン ネッカー河畔にたたずむヘルダーリンの塔

宿させて頂き、得難い出会いがありました。ジーベトさんは、当時ケルンの日本文化会館館長だった松田智雄先生と親しかったのです。ある日、ケルンからご夫妻で来訪された機会にご紹介頂きました。松田先生は経済学者でしたが、宗教改革やルターの研究もされていたので、バッハのカンタータの研究をしていると言ったら、激励して下さいました。

当時、明治学院大学の学長をされていた和田昌衛先生にも、ジーベトさんのところでいちどだけお会いしました。チュービンゲンに留学するにあたっては、前もって小包を二〇個ぐらいも船便でジーベトさん宛に送っておいたのですが、それが我々の到着する直前に着いたのです。ジーベトさんのところにチュービンゲンの郵便局から電話があり、クルマで取りに来てくれたら配達料を免除すると言ってきたのです。そこで彼は、たまたま遊びに来ておられた和田先生も動員して、ふたりで二〇個もの小包を運んで下さったのだそうです。誠に申し訳なく、和田先生にも心からお礼を申し上げたいです。なんでも帰国されてからすぐに亡くなられたそうで、その後お目にかかることはありませんでした。ともかくそれから一五年後に、私は明治学院大学に就職するわけですが、このことからご縁を感じますね。

### 『新バッハ全集』と私

このような私が『新バッハ全集』の教会カンタータの巻の校訂を任せて頂いたのは、指導教授のダーデルセン先生のお陰です。

ダーデルセン教授は、毎学期、バッハ・ゼミナールを開講しておられました。もちろん私としては欣喜雀躍として参加したわけですが、クリスマス休暇にとんでもない宿題が出ました。それは《無伴奏チェロ組曲》について当時現存していた三種類の筆写楽譜（写本）の関係を証明せよ、というとても難しい課題でした。あとでわかったのですが、当時『新バッハ全集』では、ある偉い先生がこの曲集の校訂を

担当していたのですが、編集委員会としてはその結果に懐疑的だった。そこでなにも言わずに私たち若者に課題を出したのでした。三種類の筆写楽譜とは、Aがバッハの妻アンナ・マクダレーナによるもの（図版5）、Bがバッハの弟子ヨハン・ペーター・ケルナーによるもの、どちらもバッハ生前に写譜されたものですが、ケルナーのものの方が少し古い。そしてCは、バッハの死後、一八世紀後半に筆写されたものでした。

さて、これら三種類の筆写楽譜の関係を証明するのは、原理的には簡単です。三者をそれぞれ書き写しながら、筆写の際に生じた誤りを見つけ、それによって筆写作业の実態を推定することができるはず。コラツィオン Kollation という比較作業をして、これらの筆写作业の系図を作成すればよいのです。原理は簡単ですが、実際には非常に手間がかかって間違えやすい。調べてみると、まず資料Aに一部抜けがありました。さらに資料Bにも抜けが見つかりました。逆に、資料Aには、一小節多い部分さえある。ということは、バッハの生前に



図版5 アンナ・マクダレーナが筆写した組曲第3番の冒頭  
Deutsche Staatsbibliothek Berlin. Mus. ms. Bach P 269.

写譜されたこれら両者は、どちらも互いに無関係に成立したということになります。

従来楽譜は、こうした資料批判的な考察を十分に行わず、最初からアンナ・マクダレーナ・バッハによる資料Aをもとに校訂するのが常道でした。だから、彼女がおそらく誤って一小節多く書き写した小節までも採用することが多かったのです。特に彼女は、弦楽器は弾けなかったもので、一つ一つの音符はかなり正確に写したものの、スラーの書き方はかなりいい加減であったことがわかっています。

この課題の目的は、こうした細かい仕事をきちんとこなし、しかも資料批判的には三者がほぼ同等の価値を持っていることを、あらゆる先入観から解放されて証明することでした。しかし、休暇が終わって答え合わせをしたところ、ほとんどの学生たちは、従来校訂者と同様に、アンナ・マクダレーナによる筆写楽譜を最重要と答え、意外な正解を答えられたのは私だけだったので。楽譜校訂というのは、こういうきわめて細かい仕事をきちんとこなし、しかも第三者にわかるように証明していかねばなりません。私はすでにライプツィヒで、ノイマン先生の指導のもとに、来る日も来る日も校訂報告書を読み、こうした手続きを追体験していましたから、常識という落とし穴にはまることもなかったわけです。結局、研究者はあまり頭脳明晰でない方が良いかもしれません。もちろん、そういう方も多くおられるかもしれませんが、研究者として成功する最大の要因は忍耐力だと思えます。まあ好きだからこそできるということもあります。頭のいい人は、こういう馬鹿げてめんどろな仕事はできないかもしれない。たとえばピアノの練習でも、いやになるような指の訓練をマスターした人だけが、はじめてほんとうにすばらしい演奏ができるようになるわけですが、研究者の場合も同じようなことが言えると思えます。

ともかく、この難しい試験を克服したあと、ダーデルセン先生の推薦で、『新バッハ全集』の校訂者のひとりに加えて頂くことになったのです。教会カンタータの巻は一応すべてアルフレート・デュル博士

が校訂されることになっていましたが、その中から五巻ほどが候補として挙げられました。私が選んだのは、その中でも二冊分の分量のある第一編第三四巻でした。作品的にも、初期の傑作から後期の大作に至る七曲を含み、いずれも傑作揃いでした。特に一〇六番《神の時は最善の時》BWV一〇六は、名曲中の名曲です。「種々の用途及び用途不明の教会カンタータ」という内容も謎めいていて興味をそそられました。

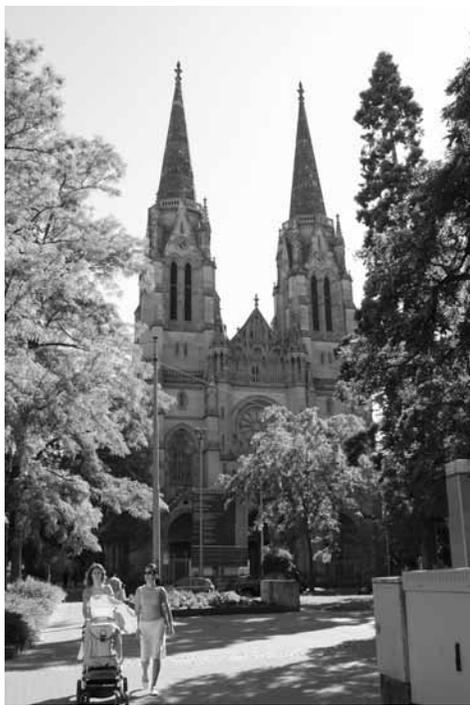
ダーデルセン先生の偉いところは、こういうときに「マール・ゼーエン（まあ、いいだろう）」と言われることです。つまり、二冊分の分量で大変そうだけれども、やらせてみようというわけです。普通ですとすぐに否定的なことを考えがちですが、先生は常に前向きで、私のようなできない学生にもこんな大きな課題を与えて下さり、しかも常に愛情を持って見守って下さいました。

たとえばカンタータ一〇〇番《神のなし給うことに理あり》BWV一〇〇など、例外的に全てのパート譜をバッハ自身が書いている。こういうものを書き写しながら自分で頭の中で歌ったりしているうちに、バッハさんが何を考えているのかなどが、身体に入ってくる。そういうことが大事なのです。たいへんな時間ではあるけれど、それはまた幸せな時間でした。そしておそらくそうした体験が、研究と演奏のどちらにおいても、今の私を作っていることなのだと思います。

もちろん実現できなかったこともあります。たとえば一〇六番《神の時は最善の時なり》にしても、リコーダーのパートはへ長調、その他のパートは変ホ長調で書かれているので、へ長調と変ホ長調の二種類の校訂楽譜を作成しましたが、出版されたのは経費とスペースの関係で実用を重視したへ長調版だけになりました。変ホ長調版は、すでに『旧全集』で出版されていたこともその理由でしょう。『新バッハ全集』は二〇〇六年に全一〇八巻が完結しましたが、今後、補巻が出版されるようです。おそらくはこのカンタータの変ホ長調版も、次世代の研究者によって校訂されることになるでしょう。

## 指揮者としての活動

テュービンゲン大学留学時代、思いがけない出会いから指揮者としての活動を始めることもできました。大学音楽監督で指揮者のアレクサンダー・スムスキー先生はルーマニアからの亡命者。セルジウ・チェリダツケの友人で、シエナのキジアーナ音楽院ではフランコ・フェラーラの助手もつとめ、ジュゼッペ・シノーポリも教えられたという大変な人物でした。ある意味で、テュービンゲン大学で燻っておられたときに指揮法を教えていただくことができたのです。やがてハンブルクの北ドイツ放送合唱長にスカウトされるのですが、その機会に、先生の推薦を頂いてシュトゥットガルト聖母マリア教会代理合唱長として指揮活動を始めることができました(図版6)。この教会はカトリックだったので、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、ブルックナーなどの美しい宗教曲を指揮することができました。近年、ウィーン音楽友協会資料室オットー・ビーバ博士と共同企画で「ウィーン音



図版6 シュトゥットガルト・聖母マリア教会

楽散歩」という演奏会をすることができましたが、僕としてのルーツはこのあたりにあります。

## 一九七九年に帰国し現在に至る

一九七九年に『新バッハ全集』の教会カンタータ巻の校訂を終え、博士論文としてテュービンゲン大学に提出し、帰国しました。スムスキー先生が言われたように、指揮者としてドイツに残るという道を選びましたが、帰国後、九年間はさまざまな大学の非常勤講師をしながら、数多くの本や原稿を書き、NHKでのFM放送で音楽番組を担当するなど多忙な生活を送りましたが、ある意味で「黄金時代」だったと思います。一九八五年のバッハ・イヤーには新潮文庫の『バッハ』が出ましたし、サントリー音楽文化展「バッハ生誕三〇〇年」の日本側監修を務めることもできました。『原典版のはなし』(全音楽譜出版社、一九八六年)の出版を機に、日本経済新聞への執筆活動が始まりました。『バッハ・カンタータ研究』(音楽之友社、一九八七年)によって、京都音楽賞研究評論部門賞、辻荘一賞を頂くこともできました。平島正郎先生のお陰で明治学院大学文学部助教授となったのは一九八九年。翌一九九〇年には芸術学科が創設されました。

ドイツとの関係も再開し、二〇〇三年には小林義武さんとふたりで、ライプツィヒ・バッハ・アルヒーフ主催のシンポジウムに招待されるという楽しい思い出もあります。ふたりともドイツで苦勞をしたので、このときは感無量でした。その小林さんが二〇一三年に他界されたことは、私にとっても大きな喪失です(図版7)。

一九八五年には作曲家の諸井誠先生を中心に日本アルバン・ベルク協会が創立され、私は事務局長を八年務めさせていただきました。諸井先生は、東京音楽学校の池内友二郎先生の作曲クラスで叔父の乾春男と同級生だったので、私のドイツ語力を見込んで事務局長を頼んで

下さったのです。『ベルク年報』創刊号には「バッハと新ウィーン楽派」という論文を書かせていただき、私の学問的世界も広がっていき



図版7 バッハ・アルヒーフでのシンポジウムでの小林義武氏と樋口 2003年

ました。

明治学院大学に芸術学科が創設されたのは一九九〇年。当時の学長森井眞先生、文学部長平島正郎先生のご努力の賜物でした。そのお手伝いをさせて頂いた私は、二〇〇〇年から文学部長、二〇〇四年から図書館長もさせて頂きました。文学部長としての仕事として特に思い出に残っているのは、文学部から心理学を独立させて心理学部を創設するお手伝いができたことです。日本の心理学の草分けのひとりであった伯父の乾孝が、長く法政大学で教えながら、結局心理学部を作れないと強く思ったからでした。二〇一一年には、明治学院大学図書館附属日本近代音楽館が開設されました。この移管は大仕事でありましたが、図書館長としての経験が助けとなったことは言うまでもありません。

二〇〇一年にはシェーンベルク没後五〇年を記念し、大学内でシェーンベルク・フェスティバルを開催しました。マルチメデア展をできたばかりのパレットゾーンで開催したほか、シェーンベルクの《ピエロ・リユネール（月に憑かれたピエロ）》を指揮したことを思い出します。二〇一三年には東京オペラシティ・アートギャラリーを会場に、音楽展「五線譜に描いた夢——日本近代音楽の一五〇年」を開催することができました。十二月十二日には皇后様の行啓もあり、ご案内の榮に浴することもできました。

二〇〇〇年には明治学院バッハ・アカデミーを創立いたしました。じつは一九八四年に、ヘルムート・リリング先生が明治学院大学白金キャンパスを使って「日本バッハ・アカデミー」をなさったということがありました。チャペルでの音楽礼拝は、NHK教育テレビで全国放映されて話題になりました。その精神を継承し、リリング先生にも名誉顧問に就任して頂いての事業でした。二〇一〇年三月までの十年間、じつに五九回の定期演奏会を行うことができました。その間にも二〇〇六年にはライブツイヒ国際バッハ音楽祭に招待され、聖ニコラ

イ教会での音楽礼拝で演奏させて頂き、定期公演終了後も、サントリーホール主催の「ウィーン音楽散歩Ⅰ・Ⅱ」（ウィーン楽友協会資料室オットー・ビーバ博士と共同企画）、ベルリン・コンツェルトハウスの「日本の響き・ドイツの響き」とプリュッセル王室礼拝堂でのバッハ作曲《マニフィカト》による海外公演をいたしました。《マタイ受難曲》（初期稿）の世界初CD化も話題となりました。

本日は思いがけずテオドル・ベルヒェム賞の受賞のお知らせを頂きましたが、ドイツ学術交流会（D A A D）にも大変お世話になりました。一九八五年には松田智雄先生、東山魁夷先生、吉田久先生のお力によって「D A A D友の会」が設立されましたが、二〇〇五年からは第四代会長を仰せつかり、日本とドイツにとどまらず、東アジアを含めた学術交流のお手伝いをさせて頂いております。

明治学院大学では二〇〇〇年に大学院文学研究科に芸術学専攻を設置しましたが、主査として論文博士三名、課程博士四名のお手伝いできたことは大きな喜びでした。恩師の皆川達夫先生がライフワークの『洋楽渡来考』の二十枚の原稿を博士論文として提出されたのには驚きました。さらに中内幸雄先生、手代木俊一先生と論文博士は皆さん大家なのでどの論文も長大で、読むだけでも体力勝負でありました。課程博士となったのは寺本圭祐（アイリッシュハーブの歴史）、加藤拓末（テレマンの受難曲）、小林幸子（ワーグナーの初期作品）、久保絵里麻（鈴木鎮一）の四名で、それぞれ気鋭の研究者として活躍してくれており、将来が楽しみです。

二〇一二年、あろうことか国際音楽学会（IMS）の副会長に選任されてしまいました。海外での学会活動のほか、二〇一七年三月には東京藝術大学を会場に東京大会を開催するという大役が待っております。

これからの課題としては、まず二〇一六年三月にサントリーホールでバッハ作曲《マタイ受難曲》（最終稿）を指揮するなど、自由な立場で研究、執筆、指揮活動を行いたいと思っております。趣味の世界

では、デュル先生のようにクルマの運転が好きなのですが、ポルシェ・ドライビングスクールに入り、五月には富士スピードウェイでサーキット走行を楽しみたいと思っております。

本日の講義の最後に、昨年十月にサントリーホールで行いましたバッハ作曲《ミサ曲口短調》の最終曲「ドナ・ノビス・パチェム（われらに平和を与えたまえ）」の録音を一緒に聴いて終わらせて頂きます。

#### 【解題】

二〇一五年二月二日（土）一六時より、明治学院大学白金校舎三二〇一教室で行われた最終講義の内容を、DVDに収録された映像を元に自ら書き下ろしたものである。講義では十分に説明できなかった事柄なども適当に補充し、余計と思われるものは削除しながら執筆させていただいた。

講義の前にはドイツ学術交流会（D A A D）東京事務所長ウルズラ・トイカ博士より、筆者の永年にわたる学術と文化における国際交流への貢献のために、同会よりテオドル・ベルヒェム賞が授与される旨の発表があり、また司会を務められた芸術学科主任岡本章教授より、大文学と学科における筆者の活動について、身に余るご紹介を頂いた。心から御礼を申し上げます。

その後、受賞については、朝日新聞（二〇一五年三月五日木曜日、朝刊一〇面、「国際」欄）が「樋口教授にベルヒェム賞 独・アジア学術交流に貢献」、最終講義自体については日本経済新聞（二〇一五年三月七日土曜日、朝刊四〇面、「文化往来」）が「樋口隆一教授が最終講義『バッハ研究と私』と題して、それぞれ報じて下さった。

テオドル・ベルヒェム賞の授賞式は、二〇一五年七月一〇日（金）十一時より、ヴェルツブルク大学とドイツ学術交流会との共催によるベルヒェム教授八〇歳祝賀会（会場・同大学新教会）の一環として執り行われ、元バイエルン州文化教育大臣ハンス・マイヤー教授（政治哲学）による祝賀講演も予定されている。